

美術館をめぐるディケイドへの旅 ―熊本県美術家連盟50年に寄せて

村上 哲(美術評論家連盟会員)

1920年代から活躍したフランスの論客で、文化大臣も務めたアンドレ・マルロー（1901-1976）は、第二次世界大戦の傷もまだ癒えぬ1947年、「空想美術館」という概念を世に問う。古今東西の異文化を対比した名著『空想の美術館』において、マルローは芸術に担わされていた本来の役割を奪い去る美術館の特性に着目したが、その先鋭な眼差しはフランスの美術館に旧来の制度や旧弊からの解放を促すことになった。

18世紀末の市民革命期に誕生した美術館は、19世紀から20世紀へと醸成した自由精神／リベルテを体現する場所として、為政体制からの自立性が模索されるなか、フランスの美術館に自己省察の意識と変革への渴望が芽生えたのは必然のなりゆきであった。文化遺産を保存・継承して次代へと手渡すことはミュージアムに課せられた当然の使命であるが、美術館がその使命や責務を全うしようとするとき、旧態依然たる因襲の柵は忌避すべき障壁にはかならない。今日、フランスの美術館が共有している問題意識はマルローの思想を深く継承するものであり、2016年にポンピドゥー・センター＝メッセで企画された「空想の美術館―もしアートが消滅してしまったら？」に典型されるように、「美と芸術を洞察し、時空を超えるその価値を伝える」という美術館本来のミッションを呼び覚ました。

2000年代のフランスの美術館界には、既成の文脈の解体と再構築の波が押し寄せたが、その象徴的な存在が2006年にセヌ左岸のパリ7区に誕生したケ・ブランリ美術館であった。古今東西の異文化を融合させる革新的なそのミュゼオロジー [=美術館運営ヴィジョン]は、アカデミズムの立場からは辛辣に批判されるなど賛否両論が巻き起こったが、旧来の価値体系に鉄槌を下しながら再考を促したことは見逃せない。

古い枠組みにいつまでも隷属することは、美術館の未来にとっては唾棄すべきお仕着せとも見なされ、ミュージアムの理念やヴィジョンは10年単位のディケイドの検証を経て刷新されるべきものと考えられた。自らの歴史を紡いでいくなかで、ルーヴル美術館をはじめとするフランスの美術館には常に新機軸が拓かれてきたが、その改革と進化のプロセスは、歴史の浅いわが国のミュゼオロジーの将来像に大いなる示唆をもたらしてくれる。

翻って眼差しを熊本へと向け、1970年代からの各ディケイドに思索を巡らしながら、熊本における45年余の美術館の歴史を顧みるとき、様々な思いが去来する。熊本県美術家連盟が誕生した1970年代前半、熊本には美術館という場所はなく、海外からやってくるフランスの絵画展や全国規模の巡回展など上質の展覧会を観覧するためには、福岡の文化会館や久留米の石橋美術館へと向向いていた。このような状況のなか、美術関係者や文化関係者を中心に美術館を熱望する気運は高まり、官民あがての美術館建設計画が推進された。そして1976年の春、熊本県で初めての美術館として熊本県立美術館が産声を上げる。古今東西の美術を網羅する「総合美術館」として誕生したその創立精神は、今日に至るまで継承されながら幅広い分野の美術を対象として活動が展開されている。

熊本県立美術館にとって、準備室時代の1970年代半ばから1980年代前半までの10年は、美術館としての基礎を固めて次代を模索した「ベーシックの時代」と位置づけられる。熊本の美術展や永青文庫展、熊本の作家シリーズなど、熊本ゆかりの企画方針が確立する一方、西洋美術や古代文明など多岐にわたる全国規模の巡回展を招聘して、県内外の美術ファンのニーズに応えた。1980年代半ばからの10年は、前のディケイドにおいて培われた成果を土台にして、多彩な実験を試みた「トライアルの時代」であった。熊本発の企画を東京と神奈川へと巡回した「海老原喜之助展」や、全国的な視野のもと企画された「鎌倉時代の彫刻」のほか、1986年に開始された「現代のイメージ」シリーズや1987年の「わが国の現代絵画」などは、熊本で初めての本格的な現代美術展となった。ルドンをめぐる巨匠たち展やフィラデルフィア美術館展など、公立美術館による相互連携や共同企画が推進されたのもこの時期の大きな特徴であり、2000年以降の企画運営法への布石となっている。

20世紀から21世紀へと激変する時代のうねりのなかで、美術館を取り巻く状況やニーズが多様性を増すなか、1990年代後半から2000年代前半までの10年間に、開館20周年を機に躍動した「ダイナミズムの時代」を迎える。収集方針の刷新と予算拡大のもと、1996年から2006年にかけて東西の重要作が立て続けに購入されたが、とりわけ藤田嗣治(レオナルド・フジタ)の傑作の収集は、コレクシヨ

ンの核となり企画展開の起点ともなった。

本館と1992年に開館した分館のふたつの館をともに運営しながら、大規模な事業が次々と展開されたのも、このディケイドの特徴である。本館では、平安時代の美術、蒙古襲来絵詞展、ロダン展、バロック・ロココの巨匠などのアカデミックな企画が開催される一方、分館では、フランク・ステラとリチャード・マイヤー展やアレクサンダー・カルダー展などの現代アートが、アートポリスの建築空間と共鳴する画期的な展観が注目を浴びている。世紀の転換期における旺盛な活動の背景には、美術館への期待や要望に応えながらアイデンティティーを築こうとする熱量があった。1990年代末には海外の美術館との交流事業も推進され、オランダのアムステルダム国立美術館では「今西コレクション・肉筆浮世絵」展が実現した。

この時期には、1995年に坂本善三美術館、1999年に不知火美術館、2001年につなぎ美術館と、市町村が運営する美術館が熊本に誕生し、今日に至るまで個性的な企画運営が続けられている。とりわけ2002年の熊本市現代美術館の開館を契機として、それまで古美術から現代アートまでを幅広く展開していた熊本県立美術館は、保守本流ともいべきオーソドックスな路線へと舵を切り、同年には美術館の振興計画「ミュージアムプラン21」が策定されて、収集対象の拡大と企画事業の拡張のヴィジョンが掲げられた。

開館30年を迎えた2000年代後半から2010年代中葉までは、古今東西の美を網羅する総合美術館としての価値体系を強化し、確立していった「エスタブリッシュメントの時代」であった。2008年の「細川コレクション・永青文庫展示室」の開館を契機として、信長からの手紙、雪舟流と狩野派など、細川コレクションに関連する企画が多彩に展開された。また収集と企画の連携を図るなか、エコール・ド・パリ展、レオナルド・フジタとパリ展―藤田嗣治渡仏100周年記念、ランス美術館展などの周年事業では、全国の企画統括を任されている。この時期、熊本ゆかりの企画にも新機軸が打ち出され、加藤清正展、画家たちの上京物語、人吉球磨の歴史と美、浜田知明のすべてなどの企画に豊饒な成果が見られた。

そして熊本地震やコロナ禍による停滞を経た今、この先のディケイドを見据えて求められるミュゼオロジーとは、旧来の価値体系を再編する冒険心であろう。国内外の美術館との新たな連携や、従来の枠組みの解体と再構築、新機軸のプロジェクトを期待したい。

美術館が自らの歴史を築くなかで、収集と企画を紡いでゆく「美の記憶」の体系化こそ、美術館のアイデンティティーを醸成していく。この視座に基づいて、2010年代の前半には「熊本県立美術館の収集方針・収集計画」が刷新され、事業運営の根幹に位置づけられて今日まで続く企画展開の指針となっている。その原動力とは、美術館のめざすヴィジョンと学芸員それぞれのアイデンティティーとの「幸福な結婚」にほかならない。2020年に策定された「熊本県立美術館運営ビジョン」は2023年度末に期限を迎えるが、2024年には美術館本来のミッションへの視座に立ち返って見直すべき時期が迫る。スタッフにも世代交代の波が到来し、陣容が急激に若返るなか、美術界の人脈の継承と拡張をはじめ、キュレーター個々人の能力と組織力の強化、対外交渉術のスキルアップが求められるのはいうまでもない。

3年後の2026年の春、熊本県立美術館は50周年を迎える。そのとき、美術館はいかなる未来図を描いていくのか、そして美術館に先んじて創設された熊本県美術家連盟は、どのような支援と批評のあり方を示していけるのか。半世紀のときをともに歩んできたふたつの場の存在意義が、歴史的な検証のなかで問われている。

（むらかみ・さとし／ミュゼオロジー [美術館論]、熊本県美術家連盟委員）



©Satoshi Murakami / Art Bibliographies Archives

企画と収集で美の記憶を紡ぐ

「レオナルド・フジタとパリ1913-1931―藤田嗣治渡仏100周年記念」会場風景(2013年7月2日-8月25日・熊本県立美術館・本館)／筆者撮影

藤田嗣治(レオナルド・フジタ)の黄金期が始まる1923年の作品群を一堂に展示。《五人の裸婦》(東京国立近代美術館)、《ヴァイオリンを持つことも》(熊本県立美術館)、《裸婦》(フォール美術館、フランス/エクス＝レ＝バン)など1923年の優品が国内外の美術館から集結し、古典造形やピカソなどとの関連を検証する稀有の機会となった。